



Title	日本語学習支援の全学的な展開に向けて：OUマルチリンガルプラザとOU日本語ひろばの実践報告
Author(s)	義永, 美央子; 瀬井, 陽子; 難波, 康治 他
Citation	多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2021, 25, p. 55-61
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79103
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語学習支援の全学的な展開に向けて

—OU マルチリンガルプラザと OU 日本語ひろばの実践報告—

義永美央子*・瀬井陽子†・難波康治‡・角南北斗§・韓喜善**

要 旨

本稿は、大阪大学国際教育交流センター日本語教育研究チームで推進している日本語学習支援体制の整備に関する、2020（令和2）年度の活動報告である。今年度の大きな実績として、自律的な言語学習を支援するセルフアクセスラーニングセンター（SALC）の開設がある。本学のSALCは「OU マルチリンガルプラザ」という名称で、本学で学ぶことができる25言語の自律的な学習を支援する目的で開設されたが、国際教育交流センターはその中の日本語の学習支援を担当している。またコロナ禍により対面での支援が制限される状況において、オンラインリソースを利用した学習支援の重要性も指摘されている。これについては従来から自律的な日本語学習を支援するサイト「OU 日本語ひろば」の開発を進めているが、今年度はコラムなど読み物系のコンテンツの充実をはかる目的でサイトのリニューアルを行い、情報発信のさらなる強化に努めている。

【キーワード】 日本語学習支援、自律学習、セルフアクセスラーニングセンター、オンラインリソース

1 はじめに

2020年現在、大阪大学には2,500名を超える留学生が在籍し、その多くが日本語学習を必要としている。また、高校時代までを海外で過ごした日本人学生や学籍を持たない外国人教職員・研究員などを含めると、日本語学習を必要とする大学構成員の数はさらに増加する。これらの人たちは、母語や年齢、専門だけでなく、日本語学習の動機、必要とする日本語のレベルや使用目的、日本語学習のために使える時間、さらには学習スタイルなど、様々な面で多様性に富んでいる。彼・彼女ら一人一人の日本語学習を支援し、大学コミュニティへの十全な参加を促すためには、いわゆる教室の枠を超えた、新しい学

習環境をデザインしていく必要がある。

一方、近年の教育の課題として、主体的・自律的に学ぶために自分の学習を管理する能力、すなわち学習者オートノミーの重要性が指摘されている。自らの行動に責任を持ち、主体的に生きる人を育てるという教育上の大きな課題について、言語教育はどのように貢献することができるのだろうか。

大阪大学国際教育交流センター日本語教育研究チームでは、こうした問題意識に基づき、日本語の自律的な学習を促進・支援する体制づくりに取り組んでいる。これに関する今年度（2020年度）の特筆すべき事項として、自律的な言語学習を支援するセルフアクセスラーニングセンター（SALC）の開設がある。2020年4月、豊中キャンパスに「OU マルチ

* 大阪大学国際教育交流センター教授

† 大阪大学国際教育交流センター特任助教

‡ 大阪大学国際教育交流センター准教授

§ フリーランス

** 大阪大学国際教育交流センター特任講師

リングラプラザ」という名称のSALCが開設され、大阪大学で授業展開を行う25言語の学習に関する情報提供や学習支援を実施するはこびとなった。OUマルチリングラプラザは実施主体である大阪大学マルチリングラ教育センターに加えて、言語学習に関係する複数部局（外国語学部、工学研究科、サイバーメディアセンター、国際教育交流センター）が協力する形で運営されているが、本センターはの中で日本語学習に関する支援を担当し、学習アドバイジング、会話パートナーとの会話練習、日本語学習に関する情報提供などを行っている（本稿2.参照）。

一方、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大により、大阪府では2020年4月7日から5月21日まで緊急事態宣言が発出された。緊急事態宣言解除後も、大学への入構が制限され、語学に関するほとんどの授業がオンラインで行われる状況が続いている。本センターでは従来から日本語学習支援サイト「OU日本語ひろば」を開発し、リアル（対面）とバーチャル（オンライン）とを結んだ日本語学習支援のあり方を検討していたが（義永・角南・瀬井・難波、2020）、そうした形での学習支援体制の充実がさらに求められている。

以下本稿では、2020年度の本センターにおける日本語学習支援体制構築に向けた取り組みを報告する。2.ではOUマルチリングラプラザの概要および学習支援の具体的な活動について、3.ではOU日本語ひろばの開発方針とシステム設計の概要、そして、今年度新たに開発したコンテンツの内容について述べる。

2 セルフアクセスラーニングセンターにおける日本語学習支援—OUマルチリングラプラザの開設—

2-1 OUマルチリングラプラザの概要

OUマルチリングラプラザは、前述のとおり2020年4月に開設された。OUマルチリングラプラザの設立趣旨は、英語・日本語をはじめ多言語の自律的な学習支援を行うこと、留学生や外国人研究員と日本人学生とが多様な国際交流を図ることのできる環境を醸成すること、ウェブサイト上で大阪大学の学内の言語学習サポート情報を一元化すること、言語に関する相談業務を行い、また、自然な環境で目標言語が使える機会を提供すること、目標言語や文化への知識・理解を深めるために、ワークショップな

どのイベントを開催すること、となっている。

2020年4月に開設された当初は、大学への入構制限を受けて利用者を受け入れることができなかったが、10月に施設への立ち入りおよび対面での対応が可能になった。場所は大阪大学豊中キャンパス、サイバーメディアセンター教育研究棟4階にあり、約80㎡のスペースに机10台、椅子25脚、パーティションを兼ねたホワイトボードが置かれている。これらの什器は、学習者がニーズに合わせて利用できるよう、全て可動式となっている。開館時間は10時から17時で、教員であるコーディネーター2名、大学院生のティーチングアシスタント15名が利用者の対応を行う。2020年12月現在、OUマルチリングラプラザでは、次のような言語学習のサポートが提供されている。1) 言語学習アドバイジング、2) 会話練習パートナーとのセッション、3) 学内の言語学習サポート情報の案内、4) 教材閲覧（25言語の独習図書）、5) iPad・CDプレーヤーなどの利用、6) グループ学習および個人学習スペースの利用、である。

施設がオープンしたとはいえ、直接対面しての交流やイベントの実施にはまだ制限があり、アドバイジングや会話セッションの多くはビデオ会議ツール（Zoom）を用いてオンラインで実施されている（本稿2-2-2、2-2-3参照）。このような状況の中で、OUマルチリングラプラザで実施する各種の支援と、オンラインサイト（OU日本語ひろば：本稿3.参照）を用いた情報提供とを有機的に結びつける必要性がさらに高まっている。



写真1 OUマルチリングラプラザの一角

2-2 OUマルチリングラプラザにおける日本語学習支援

2-2-1 自律的な言語学習を促進する枠組み

ここでは、SALCとしての自律的な言語学習を促進する枠組みについて述べる。従来、SALCで提供

されるものには、1) 学習リソース（印刷教材、マルチメディア教材、オンライン教材など）、2) 個別学習エリア、3) グループワーク用エリア、4) 学習支援デスク、5) アドバイジング・サービス、6) ライティングや発音など特定のスキルを上達させるための専門家によるサポート、7) 学習法などについてのワークショップや催しのプログラム、8) 学習者ができるだけ自然な環境で目標言語を使えるような機会、9) 学習共同体を形成する場などがあった（関谷・Mynard・Cooker, 2010）。

近年、オンラインで教材が手に入るようになり、SALCのあり方は転換期を迎えている。従来提供されてきた言語学習サポートに加え、これからのSALCでは実際の場所ベースのリアル（対面）のサービスとバーチャル（オンライン）のサービスを結ぶこと、言語学習アドバイザーによってそれらと自己主導型学習が関連づけられること、自分の手で自分の学習をデザインできるよう、学び方が学べるようなリソースが示されることが求められる。次節では、OUマルチリンガルプラザにおける日本語学習アドバイジングと会話練習パートナーとのセッションについての具体的な内容を述べ、それらの活動においてリアルとバーチャルがどのように結びついているかを説明する。

2-2-2 日本語学習アドバイジング

OUマルチリンガルプラザでは、課外で日本語学習に関する相談ができる場所を提供するために、日本語学習アドバイジングのサービスが行われている。セッションの時間は、初回は45分、2回目以降は30分ほどの時間枠が設けられている。学習者は、言語学習ポートフォリオなどを用いて日本語学習における目標を明確にし、目標に到達するための教材の選定や学習方法、具体的な学習計画を立て、それら一連の過程を経て、自己主導型学習を進めていく。利用者は、日本語の授業を履修することができない外国人研究員、授業外で自分だけの目標に沿った計画を立てたい留学生など、様々である。

自律的な言語学習を促進するうえで、言語学習アドバイザーは重要な役割を担っている（マレー, 2011, Kato & Mynard, 2016）。学習者オートノミー、つまり「自分自身の学習を管理する能力」は、教師主導型の学習から自己主導型学習へと学習を転換させ、自分の学習に関する意思決定を自分で行う役割

を学習者が担っていくことで育成されるからであり（Holec, 1981）、言語学習アドバイザーは、学習者が自分の学習を振り返り学習計画を立てるためにアドバイジングを行う（青木, 2017）。

2020年4月の開設当初、OUマルチリンガルプラザでは、対面での言語学習アドバイジングセッションを予定していた。しかし、3月のCOVID-19の感染拡大の状況を鑑み、オンライン（Zoom）でのアドバイジングセッションを行うこととした。オンラインでのセッションでは、学習者とアドバイザーが紙媒体の教材を扱うことはできないが、オンライン教材を双方の画面で見ることができる。URLを送信して教材を紹介することも可能であるし、学習者が学習アプリなど利用している様子をアドバイザーが見ながらセッションを進めることができる。大阪大学の場合は3つキャンパスがあり、どのキャンパスにも日本語学習者がいるが、オンラインでのセッションを開始したことで、どこからの相談も受けることができるようになるというメリットも見られた。

2-2-3 会話練習パートナーとのセッション

日本語学習アドバイジングとともに、対面およびオンライン（Zoom）で行われている言語サポートに会話練習パートナーとのセッションがある。大学院生のティーチングアシスタント（TA）が会話練習パートナーをつとめ、申込者が準備した話題をもとに、1対1で20分間のセッションを行う。TAは、従事前に会話練習パートナーとしてのオリエンテーションを受け、できる限り学習者の話を引き出すようなやり取りを試みている。利用者は大学院生、研究生、理系文系と様々で、レベルも日本語の学習をはじめたばかりの学生から上級の学生までと幅広い。利用者が準備してくる会話の話題も、研究室で話す日常会話、教材の表現を使った会話、ビジネスの場を想



写真2 対面の会話練習の様子

定したもの、など様々である。TAは豊中キャンパス内の施設で対応しているが、利用者は申込時に対面またはオンラインを選択できるようになっており、他キャンパスからのオンライン利用者も多い。会話練習パートナーとのセッション時間を、12時から13時半の間の20分に設定していることもあり、休憩時間の一部を使って練習ができるとリピーターも増えている。



写真3 オンライン会話練習の様子

2-3 今後の展開

これまでに述べたように、2020年4月にオープンし、日本語学習の支援としては言語学習アドバイジングと会話練習のサービスを提供してきたOUマルチリンガルプラザであるが、認知度が高いとは言えない。ウェブサイトを通じて広報を行い、これらのサービスを求める学生が情報にアクセスしやすい状況をつくるのが喫緊の課題である。そのうえで、2021年度以降の展開を次のように予定している。1) 既に提供しているサービスの充実をはかること、2) 言語学習アドバイジングの方法およびツール（言語学習ポートフォリオ）を検討すること、3) 新たな言語支援サービスを提供すること、である。

まず、会話練習パートナーとして活動するTAが会話を引き出す際に参照できる教材の充実や、申込フォームの整備やセッション枠の拡大など運営面の充実も課題となっている。さらに、言語学習アドバイジングと会話練習のサービスがスムーズに連携すれば、日本語の学習に困難を感じている学生の学習方法を解決することが可能になる。学習者からの声やニーズに合わせて、他サービスの紹介を行うなど、より効果的な学習の循環をつくるために、連携体制を整えることが重要である。

また、言語学習アドバイジングについては、実践からのフィードバックを受け、方法とツールの検討

が必要である。言語学習アドバイジングの研究の歴史は長い、日本語教育の現場に導入されるようになったのはこの10年ほどで、比較的新しい実践分野だと言える。OUマルチリンガルプラザでは、学習者が言語学習の目標を明確にし、具体的な学習方法を計画できるような言語学習ポートフォリオを使用しているが、多様な学習者に対応でき、汎用性のあるポートフォリオにするために改善の余地がある。また、オンラインで使用できるような仕様に開発できれば、オンラインセッションで活用できるだけでなく、学生が場所や時間を選ばずに使えようになる。言語学習アドバイジングの方法とともに、ポートフォリオのコンテンツについても実践を通じた展開が課題となっている。

新たな言語支援サービスの提供については、2節で述べたライティングや発音など特定のスキルを上達させるための専門家によるサポートなどが考えられる。自然な環境で目標言語が使えるような機会の提供とともに専門家によるサポート、およびアドバイジングが加わると、SALCとしての機能が果たされると言える。学生が書いたレポートや発表原稿などのライティングチェックといった、特定のスキルを上達させるための専門家のサポートの導入の検討がこれからの展開として期待されている。

3 オンラインでの日本語学習支援—OU日本語ひろばの展開—

3-1 今年度の開発方針

上記OUマルチリンガルプラザの項でも述べた通り、2020年度の事業については、コロナウイルス感染の拡大への対策を講じる必要があり、特にオンラインで提供されているOU日本語ひろばの果たす役割について、改めて模索する一年となった。

これまで、「リアルとバーチャルを結ぶ」ことで、日本語学習支援をより充実させるべく開発を進めてきたが、現下の状況においては、リアルでの活動が制限されざるを得ず、その一方でオンラインによる支援の重要性が相対的に大きくなった。また、具体的なコンテンツの提供についても、昨年度までに開発に着手した「授業をさがす」「教室をさがす」「相談する」という内容は、いずれも「リアルとバーチャルをつなぐ」「キュレーションを通じて既存リソースへのアクセスを促進する」ことをめざしていたが、

今年度は、よりコンテンツの提供に重点をおいて、コンテンツの幅を広げることを目指すことにした。

一方、コンテンツの提供についての体制づくりも行った。具体的には、国際教育交流センターの教員の専門性を生かしたコンテンツ作成、および、大学院教育と連携したコンテンツ作成の2つの方向性に基づき、継続的なコンテンツ提供の体制整備を行った。前者は、独習が難しい特定のスキルの習得のための「専門家のサポート」をオンラインでも受けられるよう、オンラインでの講座を開設することとし、今年度は、まず「発音」に関連したコンテンツの作成に着手した。後者は、言語文化研究科および高度教育プログラムにおける授業科目を通じ、受講生と連携してコンテンツ作成を行った（具体的なコンテンツの内容については本稿3-3参照）。

現在、コロナ禍により、留学生を含む多くの日本語学習者は、来日していても大学への入構や教職員・友人との直接的な接触や交流の機会が制限され、孤立しやすい状況にある。必要な情報へのアクセスが困難な学習者のために、オンラインならではの良さを生かし、より広く、速く情報を手に入れるとともに、在宅でも支援を受けられることを開発の目標とした。

3-2 システム設計

2019年度末時点でのコンテンツは、大学内外の日本語教室の案内や、図書館の蔵書に対応した教材リストなど、既存のリソースを整理して提示したものが中心である。これらは、必要なタイミングで確認できれば良いページであるため、サイト内の同じ場所に置いておくことで特に問題は無い。それに対し、2020年度の追加コンテンツは、学習をテーマとした様々な読み物や動画配信の記事であり、しかも定期的に新しいものを追加公開していく予定となっている。読者対象もこれまでのコンテンツより広く、なるべく多くの人に読んでもらうことを期待する、情報発信型のコンテンツといえる。となると、コンテンツの見せ方も既存のものとは大きく変えなければならない。

読み物系の記事のアクセス数は、現代ではFacebookやTwitterなどでシェアされるかどうかで変わってくる。本文の内容や分量を意識するだけでなく、SNSでシェアされた際に内容がきちんと伝わるよう、タイトルや概要を整えること、サイト訪問時に他の

記事もあわせて読んでもらえるような見せ方にする、スマホでの閲覧でも読みやすくすること、などを意識して制作を行った。

また、定期的に新しい記事が公開される予定であることを、サイト全体で伝える必要がある。トップページに新着記事リストを配置したり、シリーズものであることを明記したりといった、メディアサイト寄りのデザインが求められた。これは、2019年度までの固定コンテンツ主体のデザインとは180度異なる方向性であるため、全体のデザインも大きな見直しをすることになった。最終的には、ブログ寄りのデザインでまとめつつ、これまでの固定コンテンツが埋もれないよう、サイドバーなどを使って常時配置するような形にしている。

加えて、すべてのページを多言語（日本語・英語・中国語）に対応させることになり、こちらの設計変更も同時に進められた。トップページの入り口から言語ごとに分岐させる形だけではなく、ページ単位で自由に言語を切り替えられるよう、ディレクトリ構造を再設計している。管理画面も大幅に変更し、各言語のテキストを並べて入力できるようにしたことで、翻訳から記事化までをスムーズに行えるようになった。

さらには、これまで1つのPDFファイルでまとめて提供していた「学外の日本語教室の情報」を、データベース化した。これにより、必要な情報を素早く絞り込むことができ、教室の場所も地図サービスと連動するようになった。スマホでの表示も大幅に高速化し、使い勝手が良くなっている。また、データの編集は、これまで「Excelで修正し、PDFに変換したものを再アップロードする」という手順で行なっていたが、ブラウザから簡単に修正・反映できるようになった。更新担当者の負担の軽減はもちろん、情報の鮮度の維持にも役立つだろう。

このように、新コンテンツの追加によって、訪問者に対するサイトの見せ方はもちろん、コンテンツの更新や管理を支えるシステム面も同時に強化したのが、今年度の開発内容である。

3-3 新規コンテンツの概要

本稿3-1、3-2でも述べたように、今年度はコンテンツ（読み物系の記事および動画）の充実を一つの柱とした。これらのコンテンツは、国際教育交流センター日本語教育研究チームの教員が執筆・作成

したものと、言語文化研究科の大学院生が執筆・作成したものに大別される。

教員が担当した読み物系の記事（以下、コラム）には、日本語学習を進めるためのヒントを紹介したコラムや、日本語で行われているTEDを用いた学習方法を紹介したコラムに加えて、今後シリーズ化を予定しているものとして、「日本語音声講座」がある。

「日本語音声講座」は、日本語を外国語として学ぶ学生のうち、日本語の音声について客観的かつ科学的な説明を通して理解したいと考えている学生を対象に、日本語の音声のしくみをわかりやすく伝えるものである。その際、音声学が専門ではない人にも理解してもらえるよう、「単音」「アクセント」「イントネーション」などにおける様々な課題について、一般的な用語を用い、共感できる例や事例を挙げながら音声学の視点から平易な解説を行うことにした。また、日本語母語話者が話す日本語にも学習者と同様の音声現象が観察されることにも触れることで、「問題」や「課題」として扱われる学習者の日本語音声は実は音声の一般的な傾向であることも伝えたいと考えた。それらを通して、ことばを公平かつ客観的に観察し分析できる視点を育てるとともに、学習者が自らの音声を前向きに捉えていく効果が得られるよう配慮した。

また、この講座では、日本語を外国語として教えた人にとっても参考となるリソースの提供も目指す。教育現場において、学習者の音声が目標とする音声とは違う音に聞こえた場合、学習者にどのような状態であるかを伝える必要がある。しかし、それが恣意的で一方的な解釈や評価で終わってしまわないよう、「どのように違うのか」「どうすれば目標音に近づくのか」という点について提案や対策も考える必要がある。土岐（2010）は、教える側による「公平な耳・意識の要請」を提唱している。つまり、教師が理想だと考えている日本語の音声の実態を説明するためには、日本語の多様性、外国語の音声に目を向ける必要があると指摘している。そうすることで、学習者の音声を、いわゆる「外国訛りの日本語」の音声として乱暴に扱うのではなく、ある種の言語音として平等に扱える素養が備わり、「聞き手の国際化」が実現すると解説している。本講座でも、土岐（2010）の見解に強く共感し、このような視点に基づき、「教わる側」「教える側」の両方にとって有効なコンテンツの作成に取り組むことを目標として執筆

を続けている。現時点では、「有声音と無声音」「撥音」など、数編のみがアップロードされているが、来年度中に15回の講座として完成することを目指している。

大学院生が作成したコンテンツ（コラムおよび動画）は、国際教育交流センターの教員が兼任教員として担当している言語文化研究科言語文化専攻の授業（「言語コミュニケーション論B」および「応用マルチメディア論B」）の一環として作成した。この取り組みは、コンテンツ作成に携わる大学院生の日本語学習支援に関する専門性の養成も視野に入れている。コンテンツの作成によって日本語学習者に有益な情報を提供すると同時に、コラムの執筆や動画作成に携わった大学院生にとっても、学んだ専門知識を一般の人にわかりやすく伝えるスキルや、既存のリソースを整理して紹介するキュレーションのスキルを身につける一助となることを目指す。

コラムの執筆は、まず学習者オートノミーや自律学習支援についての先行研究や実践例を調べた上で、受講生各自がテーマを選び、記事を書くという手順で進めた。今年度の受講生が選んだテーマは、「ドラマで日本語学習」「漢字・漢字語彙の学習方法」「インナースピーチで外国語学習」「日記を使った外国語学習」「教室外でのアカデミック日本語学習リソースの紹介」であった。受講生の多くが日本語学習経験を持つ留学生であることを生かし、自分の学習経験もふまえたテーマが多く採用されている。受講生が執筆したコラムは、効果的な日本語学習の方法や有効なリソースを紹介するコンテンツとしてOU日本語ひろばに掲載する。

動画では、「大阪大学生生活案内」というタイトルで、大阪大学で学ぶ学生にとって、日本語と並んで有益と考えられる生活情報の紹介を行っている。「応用マルチメディア論B」を受講している大学院生を中心に、大阪大学での研究生活を支援するための動画コンテンツについてディスカッションしたところ、日本語学習支援と並んで、渡日までの間に、大阪大学での生活を具体的に知りたいというニーズが多くあり、また、動画コンテンツとして提供するのにふさわしい内容であるとの結論にいたった。OU日本語ひろばにおいて、日本語以外のコンテンツを掲載することには議論もあったが、単に日本語だけでなく、生活情報も同じレベルで知ることが入学前の不安の減少にも役立つという意見が、多くの学生の賛

同を得た。

実際の動画制作は、留学生を含む大学院生のチームを中心に、コンテンツの内容、構成および脚本を検討、執筆、撮影、編集までの過程を試行錯誤しつつ行った。今年度は「石橋暮らし」として、大阪大学豊中キャンパス最寄りの駅中心の情報をまとめて、生活視点からまとめたものを制作した。

今年度の新規コンテンツは、上記のように、日本語の専門家だけでなく、学生を含むさまざまな大阪大学構成員からの投稿記事を広く募集し、それらをコラム形式で紹介するものが中心となる。これらのコンテンツを充実させていく過程で、教材として、あるいは独立した講座としてまとめることができるもの、新しいコンテンツのカテゴリーを形成するものも現れることを期待している。

4 おわりに

本稿は、大阪大学国際教育交流センター日本語教育研究チームで整備を進めている日本語学習支援体制に関する報告である。2020（令和2）年度の特徴として、1) 学内複数部局の連携のもとにセルフアクセスセンター（OUマルチリングプラザ）が開設されたこと、2) COVID-19の感染拡大状況下において、オンラインによる支援の必要性がさらに高まったこと、3) 日本語学習支援サイト（OU日本語ひろば）において読み物系記事（コラム）や動画など、日本語学習に関連した情報をわかりやすく伝えるコンテンツの開発に着手したこと、4) 大学院教育と有機的に連携させた日本語学習支援体制を構築したこと、という4点が挙げられる。

今後の課題として、筆者らが従来から主張していた、リアル（対面）とバーチャル（オンライン）をつないだ支援体制のさらなる充実と、広報活動の推進がある。支援体制については、現在使用しているツール（言語学習ポートフォリオ）の改善やコンテンツの充実に加えて、アドバイザー担当者、会話

パートナー、コンテンツ作成者といった多数の関係者との連絡調整、そして、ウェブサイトの情報を随時更新し適切に管理するといった、スムーズな運営を可能にするためのスタッフの確保や事務管理体制の改善も必要である。また広報活動については、学修支援や言語教育に関与する学内他部局との協力・連携体制をさらに強化するとともに、学内構成員がどのような媒体を用いて情報にアクセスしているのかを検討し、支援を必要としている人に適切な情報を届けられるような仕組みを作っていくことが重要だと考えている。

付記

本稿の執筆にあたり、JSPS 科研費基盤研究(C)「大学における自律学習支援者養成プログラムの開発」（課題番号：19K00708）の支援を受けた。

参考文献

- 青木直子（2017）「教えるのをやめる — 言語学習アドバイザーというもう一つの方法 —」『小出記念日本語教育研究会論文集』25号, pp.68-75.
- 関谷康, Maynard, J., & Cooker, L. (2010). 「学習者の自律を支援するセルフアクセス学習」小嶋英夫, 尾関直子, 廣森友人（編）『成長する英語学習者』pp.193-212, 大修館.
- 土岐哲（2010）『日本語教育からの音声教育』ひつじ書房.
- マレー, ギャロルド（2011）「セルフアクセス言語学習構造とコントロールと責任」青木直子, 中田賀之（編）『学習者オートノミー』pp.123-142, ひつじ書房.
- 義永美央子, 角南北斗, 瀬井陽子, 難波康治（2020）「日本語の自律学習を支援するオンラインプラットフォーム『OU日本語ひろば』の開発について」『多文化社会と留学生交流』第24号, pp.27-34.
- Holec, H. (1981). *Autonomy and Foreign Language Learning*. Oxford: Pergamon Press.
- Kato, S., & Mynard, J. (2015). *Reflective Dialogue: Advising in Language Learning*. New York: Routledge.